

私の家の小さな命

二年 大橋和花

私は、生き物が好きだ。幼稚園の頃から家の近くにいる、カエルやバッタ、アメンボなどで遊んでいた。その時は、ただいっしょに遊ぶのが楽しくて、生き物が好きだった。

私のその「好き」が違う「好き」になったのは、小学三年生のときだった。小学生になってから、友だちのペット自慢をよく聞いていた。そのため、自分もペットを飼いたいと思うようになっていった。そんなとき、父から職場の方が私の家に子猫を譲ってくださいさるという話を聞いた。詳しく聞くと、子猫が生まれたので、その内の一匹をひきとってほしいというのだ。当時の私は、ペットを飼いたくてたまらなかつた。なので、すぐに父に飼いたいといった。

飼い始めた頃から、私の「好き」という気持ちは変わっていった。猫が家に来る日の朝はいつもより、一時間早く起きるぐらいわくわくしていた。それと同じぐらい猫もわくわくしていたのか、家へ来ると部屋の中をいろいろ探検していた。小さい体がとてもパワフルに、動くのでびっくりした。なんだから、妹ができたみたいでうれしかった。

猫を飼い始めて一ヶ月くらいたった頃に、事件がおこった。その日、私の町内で集まりがあった。屋外に集まると聞いて猫をつれていきたいと思った。近所の友達に自分のペットを自慢したかったのだ。でも、まだ外に出たことのない猫をつれていくのは危険だと、親に言われてしまった。しかし、私は親の言ったことを無視してつれていってしまった。猫は、初めての外に驚いたのか私の腕の中から逃げ出してしまった。猫を探して見つけたのは、夕方になってからだ。そのときは、とにかく、早く見つけなくてはとあせっていたが見つけると、その気持ちは、安心と罪悪感でいっぱいになった。私は、まだこのことについては後悔している。もう、危ない所にはつれていかないようにしようと思った。

また、こんな事件も起こった。猫を飼い始めてから、半年ぐらいたった頃だった。ある日ボロボロの状態で猫が帰ってきた。どうやら他の猫と喧嘩をして来たらしい。私とお母さんは猫を、急いで動物病院につれていった。すると、腰の骨にヒビが入ってしまったことが分かった。私はそれを、聞いたときとても心配した。猫同士の喧嘩は誰も悪くはない。動物の問題なので、人間はどうすることもできない。だからこそ、私は怖かった。もし猫に、なにかあったらどうしようと思った。二匹とも喧嘩をしないうでほしかったし、それにケガをしてほしくなかった。猫のケガが治るまでの間、もし死んでしまったらと思うと、私は気が気ではなかった。猫が元気を取り戻して、やっと私は安心することができた。

他にも、この猫のように小さな命はたくさんいて、たくさん消えている。私は猫を飼うことで、命の尊さや大切さを知ることができた。今の私には、消えていく命を守るなんて大きなことはできない。なので今は、目の前にいる命を守っていききたいと思う。